



## 大里

### 三月の節句

旧暦二月の節句の日、かつて大里では、女の子は親から木の皿**A**やさげ重(持ち手付の重箱)をもらって近所を訪ね、お餅を三つもらった。また、女の子達は大鍋をもって海岸のクレ岩**B**に集い、ご飯作りを練習した。数え年で十三歳の子がまとめ役になる。味噌汁の具は豆腐と海苔。仲間の手が一番大きな子が、海岸の海苔をひとにぎり掴んで汁に入れる。

大里の他の行事だが、十四歳になる女の子を『フゼ』と呼び、親戚など親しい大人が櫛や髪留めなどを贈った。贈り物をくれた大人とは、あの世で再び会えるらしい。約九十年前の風習となる。

実は今から約四十年前前は、三月節句に外で食事する風景は全国にあった。以下、柳田國男著の『年中行事覚書』の要約だが、対馬では、女性や子供が幾十組と重箱を下げて海岸を歩き、奄美大島では浜下り(ハマオレ)と呼ぶ遊びをした(なお、ハマオレは旧暦四月の初午の日に近い日曜に行く**C**。奄美大島では三月節句に赤ちゃんの足を海に浸す風景もある**E**)。

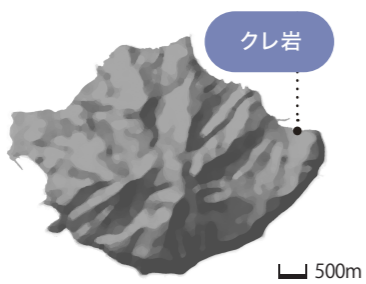
そもそも節句は古くは節供と書き、供の字には食物という意味と、人が集って飲食することも意味した。同じ食物を分けあい腹に入れ、互いに眼に見えぬ絆を作るという古い信仰に由来するという。

柳田氏曰く。新暦の導入で、節供に重要だった季節感は消えた。せめて月と盆踊、五月節供の柏餅と、柏の葉の伸び方との関係ぐらいは、暦が喰いちがわぬようにしたい。

### 思い出話

「フゼの話は姉がしなければ、誰も知らない話になるところでした。」

大里出身八〇代女性



# 4